

外科診療にみる医学留学へのパスポート

【内容】

今回の『医学留学へのパスポート』は、アメリカで一般外科の研修中の先生から、研修が終わりアメリカにてそして日本にて教えておられる先生等々、人生のいろいろなステージにおられる先生に原稿をお願いした。人生の違ったステージにおいてアメリカでの外科のトレーニングの見方も変わってくるのではないかという意図からである。

私の場合は、アメリカと日本両方にて研修を受け、両方にて教育機関で教えた経験を持つといった意味で少し特殊であり、その観点よりこの本に寄稿して下さった先生がたの意見を解説してみたい。

●なぜこの時代にアメリカへ行くのか？

これはアメリカでの外科研修を考え始めた医学生や研修医の先生よりよくされる質問である。「日本の外科は世界でもトップレベルだから、わざわざアメリカまで勉強しに行かなくてもいいよ」と周りの先生がたから言われることにより起こってくる質問なのだが、今回寄稿をして下さった先生がたの経験を見てもらえばわかるように、アメリカの外科研修は、一定の期間に“独り立ちできる **General surgeon**”を育てるという意味で、日本の研修とは決定的に違ったトレーニングである。

この“独り立ち”と”**General**”がアメリカの研修を理解する鍵となる。外科の広い分野の様々な経験があるから早く独り立ちができ、独り立ちして困っても広い過去の経験があるから何とか自力で（または最小限の助けで）安全に難局を乗り切って行ける。私はそれがアメリカの外科研修の最も大事にしているものだと思う。

日本の外科の頂点におられる先生がたは確かに世界でもトップレベルの外科医であり、その意味では日本の外科のレベルは高いのであるが、その先生がたの恩恵にあずかる患者さんの数が限られていることを考えると、早く独り立ちができ、安全に手術ができる外科医を育てる研修のシステムが日本で必要なことは察しがつくのではないかと思う。

日本は島国であるがために歴史が始まって以来努力をして外から文化を取り入れ、それを独自の文化と融合して発展してきた国である。この世界が狭くなってきている時代に、自国のみの標準でものを考え、外の良い文化を受け入れる努力をしないと日本はますます“ガラパゴス化”の一途をたどるかもしれない。

アメリカの外科研修の意義は本当にそれを経験した人のみを知るものであり、学ぶことができるか否かは両方の研修を受けて初めて、公平な判断ができるのではないかと思っている。

なぜアメリカで研修をしたいのか？ その理由は人それぞれ様々であるが、はっきりしているのは、確固とした信念がなくてはアメリカでの外科研修を終えることはできないということであろう。

●私の経験から～アメリカで得られるものとは～

これは個々の経験の違いから、各々得たものが違ってくるのであるが、私の場合以下のようによまとめられる。

(1) 病態生理から考えた診断治療をできるようになった——検査、画像診断だけに頼ることなく患者さんより必要な情報を得、鑑別診断をしてゆく、そして個々の患者さんに適した治療を **Evidence based medicine** を理解した上で選択できるようになった。

(2) 自分の専門分野において、独り立ちして、安全に患者さんの治療ができる——特に非常に難しいケースを安全に治療できたとき、今までのトレーニングの成果を実感することがある。

(3) 臨床の場で教育をすることが喜びを持つてできるようになった——これは自分が正確な最新の知識と技術をもっていることの裏返しである。

(4) 他科の専門家との連携の重要性を認識し、最適な治療法を協議の上選択してゆく姿勢を学んだ。

(5) 医療文化、制度の違いに目が向くようになった。

(6) 臨床研究の重要性を理解し、その結果を解釈できるようになった。

このうち (1) はいわゆる **Generalist** としての **Art of medicine** の部分 (町先生の章を参照) であり (2) は **Generalist** の能力にて裏打ちされた **Specialist** としての能力である。(3) は教育者としての能力、(4) は **Multi-disciplinary team** の一員としての能力、(5) は国際的な医師に必要な資質、(6) は臨床研究者としての資質と考えられる。

このような、能力・資質はやはり自分のすぐ近くにモデルとなるような **Mentor** (指導者) が存在し影響を受け、そのようになりたいと思うことによる部分が大きいと思われる。

日本とアメリカにて教えた経験から、やはり検査中心となる日本では、**General surgery** の特に **Art** の部分を学ぶのはなかなか困難であると思われ、なおかつ外科医における医学教育者としての教育は現在行われていないのが現状である。また **Multi-disciplinary care** については一部の施設にて行われているに留まり、普及にはいまだ時間がかかる状況である。

アメリカでの外科臨床研修は決して容易ではないが、自分を変える努力と強い意志があれば可能である。若い間に広い世界に出て人間として、医師として大きく成長してほしい。そして、私たちの仲間が増え、いつか日本の医療をよくしてゆく力になっていけることを、強く望んでやまない。